

只見ユネスコエコパーク
自然首都・只見見展



「自然首都・只見」展にあたって

福島県ただみまち只見町は、福島県の最も西に位置し、新潟県との県境にある越後山地に接しています。町の総面積およそ7万5千ヘクタールのうち、実に94%が山林原野で、只見川、伊南川いながわ沿いの平地部に人が住む典型的な山間部の町です。人口はおよそ5千人。過疎化と高齢化は進んでいますが、年寄りはいたって元気で、国内でも有数の長命な住民の多い町です。主な産業は農業で、米のほか、トマト栽培が有名です。また、豊かな生物資源にも恵まれ、山菜やキノコ、淡水魚などの恵みは、地域の暮らしや経済を潤しています。そうした只見町の自然環境やそれを拠り所とした歴史、民俗、文化は、縄文時代から続く東北地方の原風景を色濃く残し、日本の誇る財産であるともいえます。



写真は只見川と伊南川の合流点付近。背後の山は柴倉山と中央やや左に蒲生岳。手前の集落が館ノ川地区、奥が役場などがある只見地区。

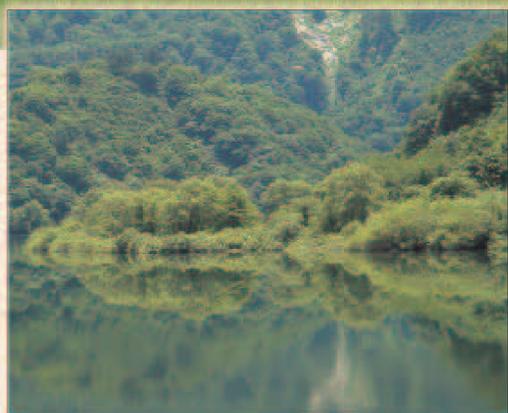


- ▲カタクリの群落
- ◀フクジュソウのお花畑

只見の春

只見の春は、山腹斜面のなだれと雪解けとともに始まります。雪解けが進むにつれ、ブナ

の新緑は全山に広がり、無彩色の山肌は独特のライトグリーンに劇的に塗りかえられていきます。明るい林床に顔を出した草花は、雪消えを追って勢いを増し、一面のお花畑をつくります。最初に咲く花はフクジュソウ、それに続いてカタクリ、キクザキイチゲ、さらにコシノコバイモ、エゾエンゴサク、ニリンソウなどなど。それこそ、只見のどの場所でも、野にも山にもふつうに見れる光景です。樹木ではキタコブシ、タムシバ、オオヤマザクラの花々が彩ります。次第に、それらの花が散っていく中で、山々の緑は色を濃くしていくのです。



梅雨明けとともに始まる只見の夏。気温が上がるとともに、大気は上昇し、青い空に入道雲が湧き上がります。森の緑は、いっそう濃さを増し、水辺を渡る風に川面がきらめきます。この季節は動物たちがもっとも活発に動き回る季節でもあります。大空ではツバメ、水辺にはオニヤンマが飛び、夕刻になるとさまざまなコウモリが飛び交い、昆虫たちを追いかけます。川の中ではイワナ、ヤマメが餌を求めて身をひるがえしています。ツキノワグマはヤブの中を闊歩し、カモシカは、急斜面で物思いに耽っているのでしょうか。7月、宵闇の訪れとともに、田んぼや水路のまわりにゲンジボタルやヘイケボタルが青白い光を放ちながら舞う光景は幻想的です。只見の夏は、寒暖の差が激しく、日中は30℃を超えますが、朝晩の気温は急激に下がって、霧（もや）が発生します。その川霧が川面をおおいつくす景観は、只見の夏の風物詩となっています。

写真上は楢戸地区、下左2枚は只見川本流
下右は、夏の朝によく見られるブロッケン現象（只見ダム）

只見の夏



- ▲ 蒲生川の溪畦林
- ◀ 里山にも雪が降りてきた

只見の秋

只見の秋は足早にやってきます。8月の盆を過ぎると、朝夕の気温

は急に下がるようになり、山間に霧が立ち込めます。さらに季節が移り、10月下旬には紅葉の季節を迎えます。只見の森林は、奥にブナ、里にコナラ、急な斜面にミヤマナラが生育しています。そのため黄色から赤銅色の圧倒的な世界が広がります。例外的にハウチワカエデ、コハウチワカエデなどのカエデの仲間やヤマウルシなどが鮮やかな赤のアクセントをつけます。その色は、日々刻々と変化し鮮やかさを増していき、晩秋、木枯らしが吹きつけると風に舞い、一夜にしてぱらぱらと音を立て落ちてしまいます。これが只見の秋の光景です。